

飯坂ゆき

泉鏡太郎

青空文庫

たびこれ 旅は此だから可い——陽氣も好と、私は熟として立つて視て居た。

ごくわつじふさんにち 五月十三日の午後である。志した飯坂の温泉へ行くのに、汽車で伊達驛で下りて、すぐに俵をたよると、三臺、四臺、さあ五臺まではなかつたかも知れない。例の梶棒を横に見せて並んだ中から、毛むくじやらの親仁が、しよたれた半纏に似ないで、威勢よくひよいと出て、手繰るやうにバスケットを引取つてくれたは可いが、續いて乗掛けると、何處から繰出したか——

まさか臍へそからではあるまい——蛙かへるの胞衣えなのやうな管くだをづるりと伸のばして、護謨輪ごむわに附着くつつけたと思ふと、握おも拳にぎりこぶしで操あやつつて、ぶツノと風かせを入れる。ぶツノ……しゅツノと、一寸手間ちよつとてまが取とれる。

蹴込けこみへ片足かたあしを掛けて待つて居たのでは、大おほいに、いや、少くとも湯治客たうちぎやくの體面たいめんを損そこなふから、其處そこで、停車場ていしやぢやうの出口でぐちを柵さくの方ほうへ開ひらいて、悠然いうぜんと待つたのである。

「ちよツ、馬鹿親仁ばかおやぢ。」と年紀としの若い、娑婆氣しやばけらしい夥間なかまの車わかいしゆ夫うしろあるきが、後歩行うしろあるきをしながら、私わたしの方ほうへずつと寄よつて來きて、

「出番でばんと見みたら、ちやんと拵こしらつて置おくが可えいだ。お客きやくを待またして、タイヤに空氣くうきを入いれるだあもの。……馬鹿親仁ばかおやぢ。」と散溢ちりこぼれた

せきたんくづ 石炭屑を草鞋わらぢの腹はらでバラリと横よこに蹴けつて、

「旦那だんな、お待遠まちどほさま様さまづらえ。」何處どこだと思おもふ、伊達だての建場たてばだ。組く

みあひ

合あひの面つらにかゝはる、

と言いつた意氣いきが顯あらはれる。

此方こつちで其その意氣いきの

あらは 顯あらはれる時分じぶんには、

親仁おやぢは車くるまの輪わを覗のぞくやうに

踞しゃがみこ込んで、

髯ひげだ

らけの唇くちびるを尖とがらして、

管くだと一いつ所に、

口くちでも、

しゅツツ息いきを吹ふ

くのだから面おも白しろい。

さて、若葉わかば、青葉あをば、雲くもいろくの山々やま、雪ゆきを被かついだ吾妻嶽あづまだけ

を見渡みわたして、一いち路ろ長ながく、然しかも凸凹でこぼこ、ぐらぐらとする温泉ゆの路みちを、

此この親仁おやぢが挽ひくのだから、途みち中ちゆうすがら面おも白しろい。

輕便鐵道けいべんてつだうの線路せんろを蜿々うねと通とほした左右さいうの田畑たはたには、ほの白しろ

い日中ひなかの蛙かへるが、ことく、くつく、と忍しのびわら笑はひをするやうに

鳴いた。

まだ、おもしろい事は、——停車場を肱下りに、ぐるぐると
 挽出すと、間もなく、踏切を越さうとして梶棒を控へて、目
 當の旅宿は、と聞くから、心積りの、明山閣と言ふの
 だと答へると、然うかね、此だ、と半纏の襟に、其の明山閣
 と染めたのを片手で叩いて、飯坂ぢやあ、いゝ宿だよと、正
 直を言つたし。——後に、村一つ入口に樹の繁つた、白木の
 宮、——鎮守の社を通つた。路傍に、七八臺荷車が、が
 たくくと成つて下り居て、一つ一つ、眞白な俵詰の粉を堆
 く積んだのを見た時は……

「磨砂だ、磨砂だ。」と氣競つて言つた。——

「大層なものだね。」

實際、遠く是を望んだ時は——もう二三日、奥州の旅に
 馴れて山の雪の珍しくない身も、前途に偶と土手を築いて怪しい
 白氣の伏勢があるやうに目を敬てたのであつた。

一一

荷車挽は、椿の下、石燈籠の陰に、ごろく休んで居る。
 「飯坂の前途の山からの、どんくと出ますで。——いゝ磨
 砂だの、これ。」と、逞しい平手で、ドンと叩くと、俵から
 其の白い粉が、ふツと立つ。

ぱつと、乗つて居るものの、目にも眉にもかゝるから、ト帽子を傾けながら、

「名ぶつかい。」

「然うで、然うで、名ぶつで。」と振り向いて、和笑としながら、平手で又敲いて、續けざまにドンくと俵を打つと、言ふにや及ぶ、眞白なのが、ぱつくと立つ——東京の埃の中で、此の御振舞を一口呆つては堪まらない。書肆へ前借に行く途中でもあつて見たが可い、氣の弱い嫁が、松葉で燻されるくらゐに涙ぐみもしかねまい。が、たとへば薄青い樹の蔭の清らかなる境内を、左に、右には村の小家に添つて、流れがさら々と畔を走る。——杜若が、持ぬしの札も立たずに好きなまゝ

路傍みちばたの其その細流さいりゅうに露つゆを滴したらして居ゐるのである。

親仁おやぢの掌たなは陽炎かげろふを掴つかんで、客きやくは霞かすみを吸すふやうであつた。

雨あめも露つゆも紫むらさきに、藍あゐに、絞しぼりに開ひらく頃は、嘸さぞと思おもふ。菖蒲あやめ、杜か

若きつばたは此處こゝばかりではない、前日ぜんじつ——前々日ぜんぜんじつ一見いつけんした、平ひ

泉らいづみにも、松島まつしまにも、村里むらさとの小川をがは、家々いへくの、背戸せど、井戸ゐど

端ばた野中のなかの池いけ、水みづある處ところには、大方おほかた此このゆかりの姿すがたのないのは

なかつた。又申合またまをしあはせしたやうに牡丹ぼたんを植うゑてゐる。差覗さしのぞく軒のき、

行きずりの垣根かきね越こし、藏くらの廂ひあはひ合あひまで、目めに着つけば皆花壇みなくわだんがあ

つて、中なかには忘わすれたやうな、植棄うゑすてたかと思おもふ、何なんの欲よくのないの

さへ見みえて、厳いつくしく静しづかな葉はは、派手はでに大樣おほやうなる紅白こうはくの輪わを、

臺うてなを、白日はくじつに或あるは抱いだき或あるは捧ささげて居ゐた。が、何なんとなく、人ひとより

も、空そらを行ゆく雲くもが、いろ／＼の影かげに成なつて、其その花はなを覗ながめさうな、沈しづんだ寂さびしい趣おもむきの添そつたのは、奥あう州しゅうの天地てんちであらう。

此これは……しかし、菖蒲あやめ、杜かきつばた若はは——翌よくじつ日じつ、湯ゆの山やまの水みづを

處ところ々／＼見みた、其そこ處ところにも、まだ一いち輪りんも咲さかなかつた。蕾つぼんだの

さへない。——盛さかりは丁ちやうど一ひと月つきおくれる。……六ろく月ぐわつの中ちゆうじゆ

旬じゆんだらうと言いふのである。たゞ、さきに、伊だて達ての停てい車しや場ぢやうを

出でて間まもなく踏ふみ切きりを越こして、しばらくして、一いち二に軒けん、村むらの小こ

家いへの前まへに、細ほそい流ながれに一ひと時ときはしげ一たけ際げ茂もつて丈たけののびたのがあつて、すつと

露つゆを上げあて薄うす手でながら、ふつくりとした眞ま新あたしい蕾つぼを一つ見みた。

白しろ襟えりの女をんなの、後うしろ姿すがたを斜ななめに、鬚まげの紫むらさきの切きを、ちらりと床ゆかしく

見みたやうな思おもひがした。——

其の、いま、鎮守の宮から——道を横ぎる、早や巖に水のせ

かるゝ、……音に聞く溪河の分を思はせる、流の上の小橋を渡

ると、次第に兩側に家が續く。——小屋が藁屋、藁屋茅屋が

板廂。軒の數、また窓の數、店の數、道も段々に上るやう

で、家並は、がつくりと却つて低い。軒は俯向き、屋根は仰向く。

土間はしめつて、鍛冶屋が驟雨、豆腐屋が煤拂をするやうな、

忙しく暗く、佗しいのも少くない。

猿が、蓑着て向ひの山へ花をりに行く童謡に、

一本折つては腰にさし、

二本折つては蓑にさし、

三枝、四枝に日が暮れて。

彼方の宿へ泊らうか。
あつち やど とま

此方の宿へ泊らうか。
こつち やど とま

彼方の宿は雨が漏る、
あちち やど あめ も

此方の宿は煤拂で……
こちち やど すゝはき

と唄ふ……あはれさ、心細さの、謠の心を思ひ出す。
うた ……あはれさ、こころほそ さの、うたこころおも だす。

三

二階が、また二階が見える。黒い柱に、煤け行燈。木賃御
にかい 二かい みる。くろはしら すゝ あんどん きちんおとま

泊宿——内湯あり——と、雨ざらしに成つたのを、恚う……見
りやど うちゆ あま な のを、か う …… みる

ると、今めかしき事ながら、芭蕉が奥の細道に……
いま いま こと ばせを おく ほそみち

ある。

五月朔ごぐわつついたち日の事也ことなり。其夜そのよ、飯坂いひざかに宿とまる。温泉をんせんあれば湯ゆに入いりて宿やどをかるに、土座どざに筵むしろを敷しいて、あやしき貧ひ家んかなり。灯とももなければ、あろりの火影ほかげに寢所しんじよを設まうけて云々うんく。——雨あめしきりに降ふりて臥ねる上うへよりもり、

と言いふのと、三百有餘年さんびやくいうよねんを經へて、あまり變かはりは無なささうで

と、みまはす顔かほを、いきなり、突つ然ばめ、かうもり燕つばめも蝠かうもり蝠とも飛とばずに、やなぎ柳やなぎのみどりがさ

らりと拂はらふと、そ其えだの枝なかの中なかを搔かいく潜ぐるばかり、しかも一段いちだんづい

と高たかく、め目めが覺さめるやうな廣ひろい河原かはらを下したに、まつさを眞ま蒼さな流ながれの上うへに、

鋼鐵かうてつの欄干らんかんのついた釣橋つりばしへ、なゆらくと成なつて、スツと乘の

つた。

あんどんべや、そつ行燈部屋を密と忍んで、うらばしご裏階子から、さんがいみはらし三階見霽の欄干へ
かけあが駈上つたやうである。

……しばらく、あんどんべや行燈部屋、うらばしご裏階子、さんがいみはらし三階見霽の欄干と言ふのは、なん何の、どこ何處の事だとお尋ねがあるかも知れない。

いや、じつわたし實は私も知らん。——これあと此は後で、いひさか飯坂の温泉で、ゆふねおなじ浴槽に居た客同士が、はしこゝなる橋について話して居たのを、かたへぎ傍聞きしたのである。

とみ唯見ると、わたりす渡過ぐる一方の岸は、めしたふか目の下に深い溪河——すなはすりかみがはすなはすりかみがは
即ち摺上川——がけのぞの崖に臨んで、ならづらりと並んだ温泉の宿の幾軒
んくこと々々、みなそ盡く皆其の裏ばかりが……さんがい三階どころでない、ごかいしちか五階七
い階に、ざしき座敷を重ね、てすり欄干を積んで、えんがは縁側が縦に繞り、はしごだん階子段

が横よこに走はしる。……

此この陽氣やうきで、障子しやうじを開放あけはなした中なかには、毛氈まうせんも見えれば、
 緞通だんつうも見える。屏風びやうぶ、繪屏風ゑびやうぶ、衣桁いかう、衝立ついたて——お輕かるが下
 りさうな階子はしごもある。手拭てぬぐひ、浴衣ゆかたを欄干てすりに掛かけたは、湯治場たうぢばの
 お定まりさだ。萌黄もえぎ、淡紅ときいろしどけない夜よるの調度てうども部屋へや々々／＼にあから
 さまで、下屋したやの端はしには、紅あかい切きれも翻ひらく々／＼する。寢轉ねころんだ男をとこ、柱はしらに
 凭よつた圓鬚姿まるまげすがた、膳ぜんを運はこぶ島田鬚しまだまげが縁側えんがはを——恁かう宙ちゆうに釣つ
 りさが下りつたやうに通とほる。……其その下したの水際みづぎはの岩窟いはむろの湯ゆに、立たつ
 たり、坐すわつたり、手拭てぬぐひを綾あやにした男だんぢよ女の裸身はだかがあらはれたか
 と思おもふと、横よこの窓まどからは馬うまがのほりと顔かほを出だす、厩うまやであらう。山や
 吹まぶきの花はなが石垣いしがきに咲さいて、卵うの花はなが影かげを映うつす。——宛さながら如ら、秋あき

の掛^{かけ}稲^{いね}に、干^{ほし}菜^な、大^{だい}根^{こん}を掛^かけつらね、眞^ま赤^{つか}な蕃^{たう}椒^{がらし}の束^{たば}を
 交^{まじ}へた、飄^{へう}逸^{いつ}にして錆^{さび}のある友^い禪^{ぜん}を一面^{いちめん}ずらりと張^{はり}立てた
 やうでもあるし、しきりに一小^{ひとこ}間^ま々に、徳^{とく}利^りにお猪^ち口^{よく}、お魚^{さかな}に
 扇^{あふぎ}、手^て桶^{ぶけ}と云^いふのまで結^{むす}びつけた、小^こ兒^{ども}衆^{しう}がお馴^{なじ}染^{しみ}の、當^{あて}もの
 の臺^{だい}紙^{がみ}で山^{やま}を包^つんだ體^{てい}もある。奇^き觀^{くわん}、妙^{めう}觀^{くわん}と謂^いつべし。
 で、激^{げき}流^{りう}に打^{うち}込んだ眞^ま黒^{くろ}な杭^{くひ}を、下^{した}から突^つ支^か棒^{ひぼう}にした高^{たか}
 樓^のなどは、股^{もも}引^{ひき}を倒^{さか}さま、輕^{かる}業^{わざ}の大^{おほ}屋^{やたい}臺^{たい}を、チ^きヨ^{よん}ンと木^きの
 頭^{かしら}で載^おせたやうで面^{おも}白^{しろ}い。
 湯^ゆ野^のの温^{をん}泉^{せん}の部^{いちぶ}である。

四

飯坂いひざかと、此この温泉をんせんは、橋はし一つ隔へだてるのであるが、摺上川すりかみがは
 を中なかにして兩方りやうほうから湯ゆの宿やどの裏うらの、小部屋こべやも座敷ざしきも、お互たがひに
 見え合あふのが名所めいしよとも言いふべきである……と、後のちに聞きいた。
 時ときに——今渡いまわたつた橋はしである——私わたしは土産みやげに繪葉ゑはがきを貰もらつて、
 此この寫眞しゃしんを視みて、十綱橋とつなばしとあるのを、喜多八きたはち以來いらいの早合點はやがてん
 で、十綱橋とあみばしだと思おもつた。何故なぜなら、かみ手ては、然さうして山やまが迫せま
 つて、流ながれも青あをく暗くらいのに、橋はしを境さかひに下流かりうの一方いつぽうは、忽たちまちくわつ豁ぜ
 然んとして磧かはらが展ひらけて、巖いはも石いしも獲えものの如ごとくバツと飛とばして凄すご
 いばかりに廣ひろく成なる。……山やまも地ち平線へいせん上じやうに遠とほ霞がすんで、荒くわう
 涼りやうたる光景くわうけいが恰あたか欄干らんかんで絞しぼつて、網あみを十とをばかり、ぱつ

と捌さばいて大おほきく投なげて、末すゑを廣ひろげたのに譬たとへたのだらう。と、狼うろた狽た
へて居ゐたのである。

念ねんのため、訂たゞすと、以もつての外ほかで。むかしは兩りやう岸がんに巨きよ木ぼく
を立て、之これに藤ふぢの綱つな十とすぢ條ひを曳ひき、綱つなに板いたを渡わたしたと言いふ、著いちじしき
由ゆ緒ゐしよがあつて、いまも古こ制せいに習ならつた、鐵てつの釣つり橋ばしだと言いふ……
おまけに歌うたまである。

陸みちのく奥おくの十とつな綱はしの橋くに繰つなる綱の

絶たえずもくるといはれたるかな——千せん載ざい集しふ

「旦那だんな——あの藤ふぢの花はな、何どうだ。」

「はあ。」

「あれだ、見みさつせえ、名めい所しよだにの。」

「あゝ、見事みごとだなあ。」

私は俵わたしくるまから、崖がけの上へ乗出のりだした。對岸たいがん（——橋はしを渡わたつて俵くるまは

湯ゆの原はらの宿しゆくの裏うらを眞正面まじやうめんの坂さかを上のぼる——）に五層ごそう七層しちそうを連ね

た中に、一所な、棟むねと棟むねとの高い切目きれめに、縦もみか櫓けか、偉おほいなる古木こぼくの

青葉あをばを卷まいて、其その梢こずえから兩方りやうほうの棟むねにかゝり、廂ひさしたに漾よひ羽目はめ

に靡なびいて、颯さつと水みづに落おつる、幅二間はぶにけんばかりの紫むらさきを、高樓たかどので堰せき、

欄干らんかんにしぶきを立たたせて散ちつたも見える、藤ふぢの花はななる瀧たきである。

わたしわたしは繰返くりかへした。

「あゝ、見事みごとだなあ。」

「旦那だんな、あの藤ふぢでの、むかし橋はしを架かけたげだ。」

「落おちても可いい、渡わたりたいな。」

と言つたばかりで（考慮のない恥しきは、此れを聞いた時も綱には心着かなかつた、勿論後の事で）其の時は……と言つたばかりで、偶と口をつぐんだ。

馬の背のやうに乗上つた俵の上の目の前に、角柱の大門に、銅板の額を打つて、若葉町旭の廓と鑄てかゝげた、寂然とした、明るい場所を見たからである。

青磁、赤江、錦手の皿小鉢、角の瀬戸もの屋がきらりとする。横町には斜に突出して、芝居か、何ぞ、興行もの浅葱の幟が重なつて、ひらくと煽つて居た。ぐらくと、しかし、親仁は眞直に乗込んだ。

「廓があすぞ、旦那。」

屋號やがう、樓稱ろうしよう（川かは）と云ふ字、（松まつ）と云ふ字、藍あゐに、
 紺染こんぞめ、暖簾靜のれんじづかに（必かならず）と云ふ形のやうに、結むすんでだらりと下さ
 げた蔭かげにも、覗のぞく島田鬚しまだは見えなんだ。

「ひつそりして居ゐるづらあがね。」

「あゝ。」

「夜よさは賑にぎやかだ。」

出口でぐちの柳やなぎを振向ふりむいて見みると、間まもなく、俵くるまは、御神燈ごしんとうを軒のきに
 掛かけた、格子かうしづくりの家居いへゐの並ならんだ中なかを、常磐樹ときはぎの影透かげすいて、颯さつ
 と紅べにを流ながしたやうな式臺しきだいへ着ついた。明山閣めいざんかくである。

五

「綺麗きれいだなあ、此この花はなは？……」

わたしわたしは磨みがき込んだ式しきだい臺たいに立たつて、番頭ばんとうと女中ぢよちゆうを左さ右いうにした

まゝ、うつかり訊きいた。

「躑躅つづじでござります。」と年配ねんばいの番頭ばんとうが言いつた。

櫻さくらか、海棠かいだうかと思おもふ、巨おほきなつゝじの、燃立もえたつやうなのを植うゑて、

十鉢とほちばかりずらりと並ならべた——紅べにを流ながしたやうなのは、水打みづうつた

石いし疊いだたみに其その影かげが映うつつたのである。

が、待まてよ。……玄關げんくわんぐち口ぐちで、躑躅つづじの鉢植はちうゑに吃驚びつくりするや

うでは——此この柄がらだから通とほしはしまいが——上壇じやうだんの室まで、金き

屏風んびやうぶで、牡丹ぼたんと成なると、目めをまはすに相違さうあない。とすると、先せ

祖おぢへはともかく、友とも達の顔かほにかゝはる……と膽たんを廊下らうかに鍊ねつて
 行ゆくと、女中ぢよちゆうに案内あんないされたのは、此これは又また心易こころやすい。爪尖つまさき
 上あがりの廊下らうかから、階子段はしごだんを一度いちどトンくと下おりて、ボタンと
 とびらあとびらあ扉はひを開ひけて入いつた。縁側えんがはづきのおつな六疊ろくでふ。——床とこわきの袋ふ
 戸棚くろとだなに、すぐたんすに筆筒とりつを取とりつけて、衣桁いかうが立たつて、——さしむか
 ひに成なるやうに、長火鉢ながひばちが横よこに、谿河たにがはの景色けしきを見通みとほしに据すゑ
 てある。

火ひがどツさり。炭すみが安やすい。有ありがた難たい。平泉ひらいづみの晝食ちゆうじきでも、
 昨夜ゆうべ松島まつしまのホテルでも然さうだつた。が、火ひがどツさり。炭すみが安やす
 い。有ありがた難たい。鐵瓶てつびんの湯ゆはたぎる。まだお茶代ちやだいも差さ上げない
 のに、相濟あひすまない、清きよらかな菓子器くわしきの中なかは、ほこりのかゝらぬ蒸む

しぐわし
菓子であつた。

「先づ一服。」

ながれおと
流の音が、颯と座に入つて、カカカカカカと朗に河鹿が鳴く。

あたかきつたて
恰も切立の崖上で、縁の小庭に、飛石三つ四つ。躑躅—

おどろ
—驚くな—山吹などを軽くあしらつた、此の角座敷。で、

にはとが
庭が尖つて、あとが座敷つゞきに、むかうへすつと擴がつた工合

が、友禪切の衽前と言ふ體がある。縁の角の柱に、継りな

がら、恁う一つ氣取つて立つと、爪尖が、すぐに浴室の屋根

に届いて、透間は、巖も、草も、水の滴る眞暗な崖である。危

つかしいが、また面白い。

うち
内のか、外のか、重なり疊んだ棟がなぞへに、次第低に、溪

いりう きし のぞ
 流の岸に臨んで、
 まをさふ お
 又急に降りる。……

ゆ やど
 湯の宿と、湯の宿で、
 ふくりん きふりう
 を覆輪した急流は、
 ひさしの
 廂に呑まれる。

けしき
 「いゝ景色だ。あれが摺上川だね。」

まるまげ としま ぢよちう
 圓鬚の年増の女中が、

だんな ごぞん
 「あら、旦那よく御存じでございますこと。」

そ こと がくかう おほ
 「其のくらゐな事は學校で覺えたよ。」

かんしん だうり らくだい あそ
 「感心、道理で落第も遊ばさないで。」

てやはら ねが
 「お手柔かに願ひます。」

かよひらうか
 通廊下が、
 やね
 屋根ながら、
 はすか
 斜違ひに緩く上り、

ろくしやう ゆき
 緑青に雪

げや
 下屋づくりの

六

旅費りよひが少すくいなから、旦那だんなは脇息けふそくとある處ところを、兄哥あにいに成なつて、猫ね
 板いたに頬杖ほづゑつくつと、又また嬉しいのは、摺上川すりかみがはを隔へだてた向う土手むかどて
 湯ゆの原街道はらかいどうを、山の根やまねについて往來ゆききする人ひと通りが、衣きもの
 色いろ、姿なり容かたちは、はつきりして、顔かほの臃おぼろげ氣げな程度ていどでよく見みえる。
 旅商人たびあきうども行ゆけば、蝙蝠傘かうもりがさはりかへなほ張替直とほしも通とほる。洋装やうさうした坊ぼつち
 やんの手てを曳ひいて、麥藁帽むぎわらぼうが山腹さんぶくの草くさを縫ぬつて上のほると、白しろい
 洋傘パラソルの婦人ふじんが續つゞく。
 浴室よくしつの窓まどからも此これが見みえて、薄うつつりと湯氣ゆげを透すかすと、ほかの土と

地には餘りあるまい、海市に對する、山谷の蜃氣樓と言つた
 風情がある。

温泉は、やがて一浴した。純白な石を疊んで、色紙形
 に大きく湛へて、幽かに青味を帯びたのが、入ると、颯と吹溢れ
 て玉を散らして潔い。清々しいのは、かけ湯の樋の口をちら／
 へと、こぼれ出て、山の香の芬と薫る、檜、榎など新緑の木
 の芽である。松葉もすらくと交つて、浴槽に浮いて、潜つて、
 湯の揺るゝがまゝに舞ふ。腕へ來る、乳へ來る。拂へば馳つて、
 又スツと寄る。あゝ、女の雪の二の腕だと、松葉が命の跡をしよ
 う、指には青い玉と成らう。私は酒を思つて、たゞ杉の葉の刺
 青した。

……此の心持で晩景一酌。

向うの山に灯が見えて、暮れせまる谿河に、なきしきる河鹿の聲。——一匹らしいが、山を貫き、屋を衝いて、罅に響くばかりである。嘗て、卯の花の瀬を流す時、箱根で思ふまゝ、此の聲を聞いた。が、趣が違ふ。彼處のは、横に靡いて婉轉として流を操り、此處のは、縦に通つて唳々として瀧を調ぶる。

すぽい／＼、すぽい／＼と、寂しく然も高らかに、向う斜に遙ながら、望めば眉にせまる、満山は靄にして、其處ばかり樹立の房りと黒髪を亂せる如き、湯の原あたり山の端に、すぽい／＼、すぽい／＼と唯一羽鳥が鳴いた。——世の中のうろたへものは、佛法僧、慈悲心鳥とも言ふであらう。松の尾の峰、黒髪

山は、われ知らず、この飯坂に何の鳥ぞ。

「すほい鳥ですよ。」

と女中は言つた。

星が見えつゝ、聲が白い。

いま、河鹿の流れに、たてがみを振りむながら、柴積んだ馬が
 馬士とともに、ぼつと霞んで消えたと思ふと、其のうしろから
 一つ提灯。……鄙唄を、いゝ聲で——

大正十年七月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「東京日日新聞 第一六〇九二号〜一六〇九八号」東京日日新聞社

1921（大正10）年7月21日〜27日

※「づらりと」と「ずらりと」、「前途」に対するルビの「ゆく」と「さき」、「彼方」に対するルビの「あつち」と「あちら」、「此方」に対するルビの「こつち」と「こちら」、「欄干」

に対するルビの「らんかん」と「てすり」、「温泉」に対するルビの「ゆ」と「いでゆ」と「をんせん」の混在は、底本通りです。
※表題は底本では、「飯坂《いひざか》ゆき」となっています。
※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2018年7月27日作成

2018年8月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

飯坂ゆき

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>